

主体的存在

1. 人間の場合



例の仕事
を頼む



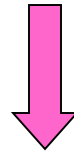
選択する



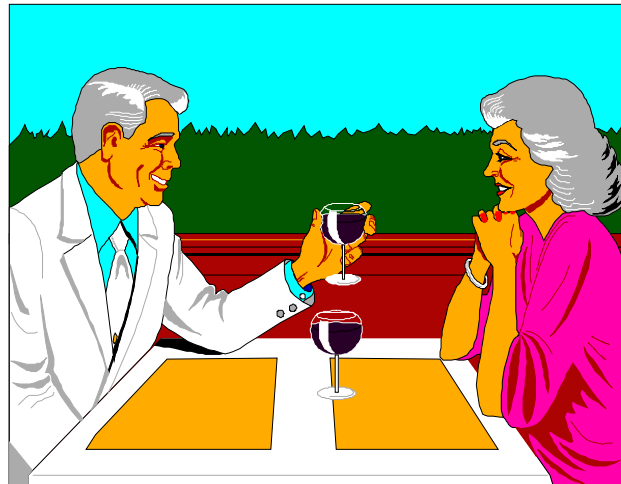
ゴルフに出かける

選択する

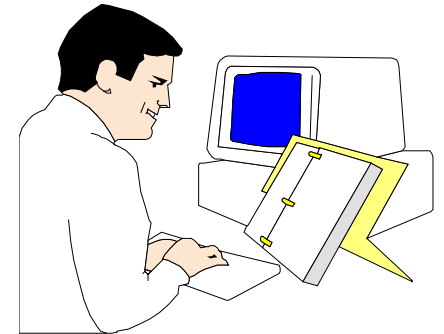
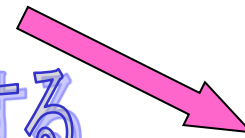
主体的存在



選択する



恋人とデートする

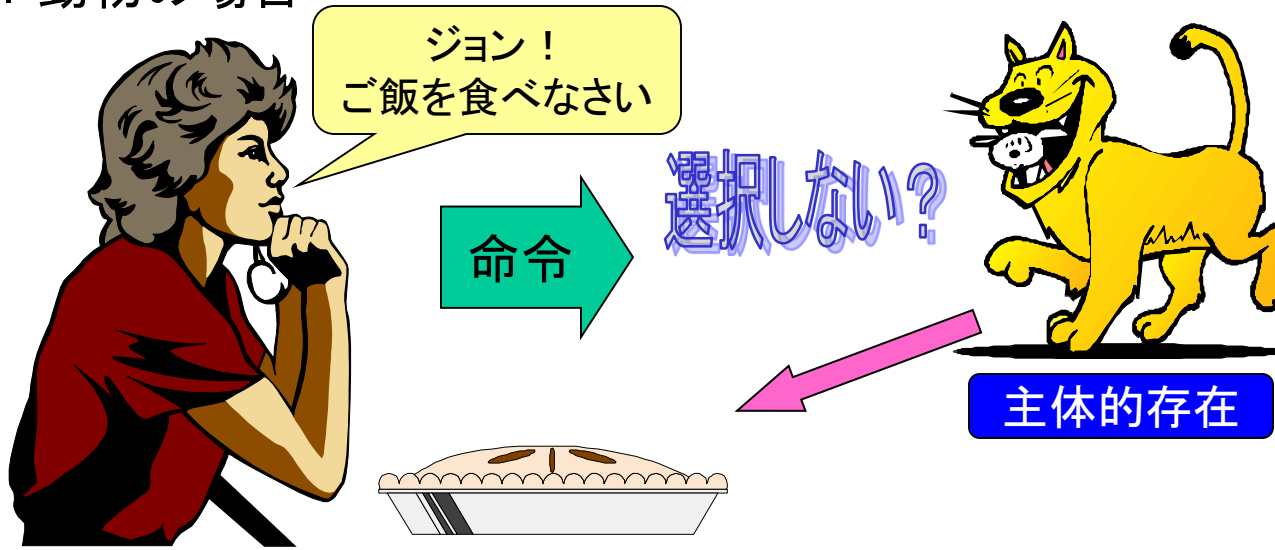


まじめに仕事する

上司から仕事を頼まれても、次ぎに取る行動は本人の選択による。このように他から命令を受けても、自らの意志によって行動を選択できる存在を主体的存在と言う。

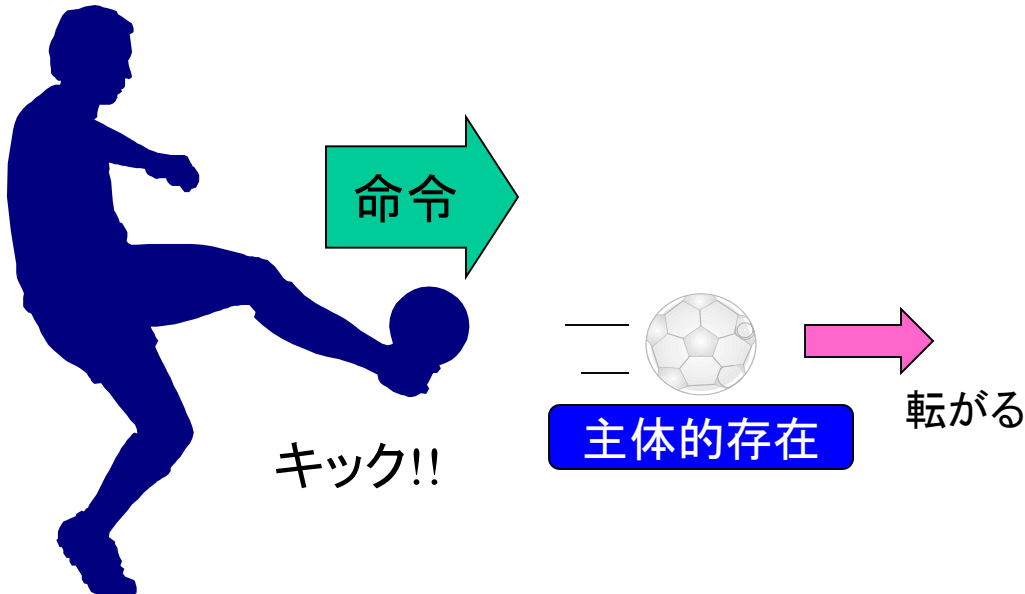
主体的存在

2. 動物の場合



動物の場合本能で行動しているため食べ物を出されたら選択の余地なく食べるように思われる。ただし常に食べるとは限らない。満腹なら食べない。それを選択しているのは主体である「犬」である。いかなる動物も生きる目的を限定された機械ではない。

3. 無生物の場合

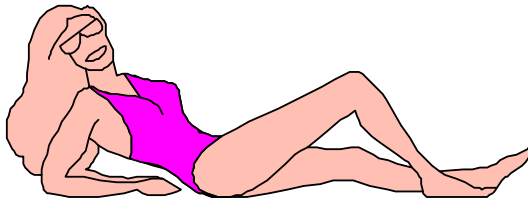


誰かが、落ちていた石ころを足で蹴った。石ころは物理法則に従って転がるだけである。ただしどのように転がるかはその石ころ自身の主体性による。石ころは物理法則に拘束されているように見えるがそうではない。石ころの行動自体が物理法則そのものと不可分、一体なのである。このように生物無生物に限らず、いかなる存在でも、それ自身の主体性を持つ。

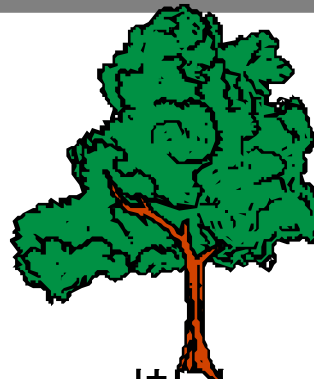
存在とは

存在とは何か

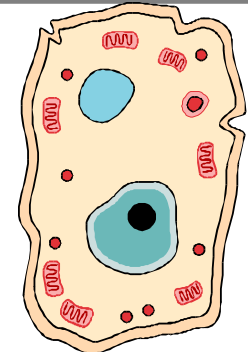
以下に示す、動物は、あるいは植物、無生物、あるいは小さいところでは一つの原子、大きいところでは地球全体に至るまで、全ては独立した主体的存在である。この主体的な存在の一つ一つを「生命」と呼んでもいい。



人間



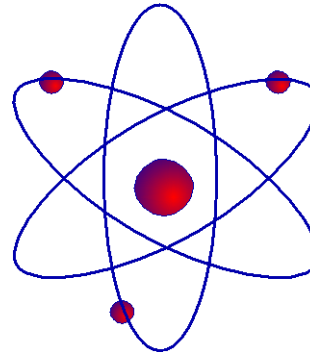
樹木



細胞



石ころ



原子

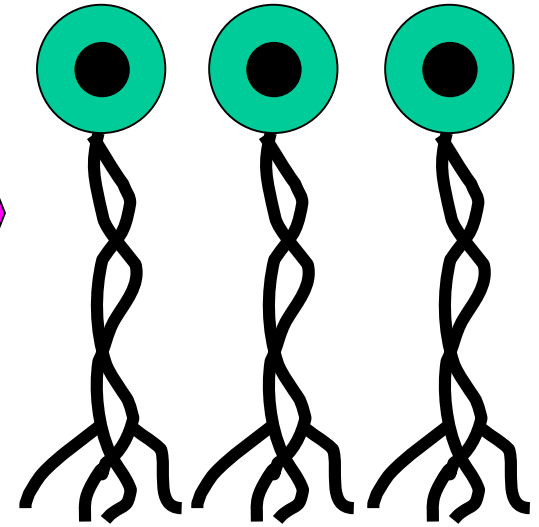
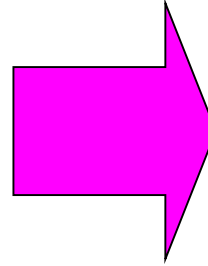
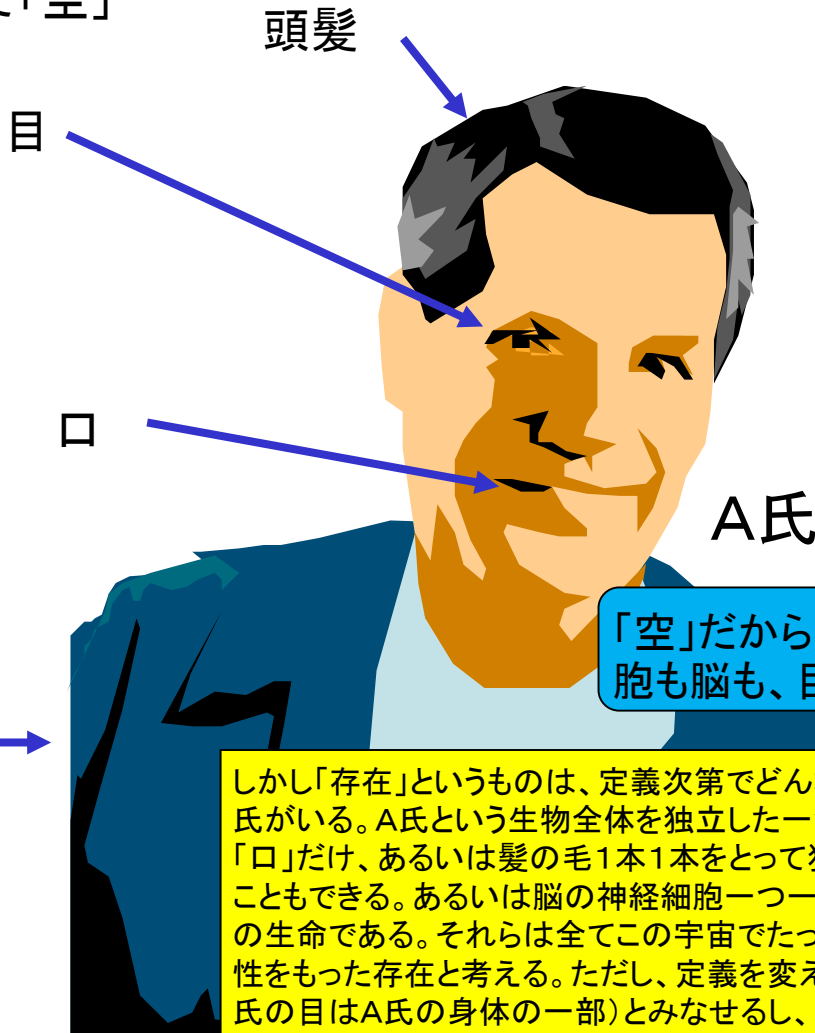


地球

ただし、一つ重要なことがある。「存在」とは確かに現実に有るものとして、観測可能でなければならない。つまりいかなる存在でもエネルギーを持つ、すなわち物質であることが条件。観測できないもの、神、聖霊、悪魔、妖精の類は「存在」ではない。

存在とは

それはあくまで「空」



神経細胞

「空」だからこそすべての存在は平等である。神経細胞も脳も、目も口も、A氏の身体全体も、ブレザーも。

しかし「存在」というものは、定義次第でどんな範囲を選択することも可能である。ここに一人の男性A氏がいる。A氏という生物全体を独立した一つの存在(主体・生命)としてもよいし、その中の「目」だけ「口」だけ、あるいは髪の毛1本1本をとって独立した(個性を持った世界でたった一つの)生命とすることもできる。あるいは脳の神経細胞一つ一つが生命であり、さらにA氏の着ているブレザーも一つの生命である。それらは全てこの宇宙でたった一つの個性を持った他と交換できないそれ自体主体性をもった存在と考える。ただし、定義を変えれば、その存在もそれを含んだ存在の一部(たとえばA氏の目はA氏の身体の一部)とみなせるし、いかなる存在の内部にもそれを構成している要素として無限の存在を含んでいる。(たとえば、A氏の脳内には神経細胞が多数、神経細胞内にも分子を内包している) このように固定された存在は一つもない。それを仏教では「空」と呼ぶ。この世に存在するもので、「空」でないものは一つもない。

【注】存在とは、それを認識する主体、すなわち自分がいなければ存在もない。自分がそれを存在と認識して、あるいは存在とみなして、初めて存在と言える。(「独我論とは」参照)

誤解しないでほしいことは、例えばA氏の脳とそれを構成している神経細胞。脳に神経細胞が含まれていても二つの存在の間に価値的差異はなく、平等である。「空」だからである。